

聖書日課 『からし種』 2024.2.11-2.18

<p>2月11日 (日)</p> <p>詩編 89編</p>	<p>「それでもなお、わたしは慈しみを彼から取り去らず、わたしの真実を空しくすることはない」(34節)。「主の慈しみをとこしえに歌います」という告白から始まるこの詩編には「慈しみ」という言葉が七回出てくる。そこでは「主の慈しみ」は「主の真実の契約」と同義である。何があっても揺るがず、崩れることのない「主の真実」によって、今日私たちは生かされている。</p>
<p>12日 (月)</p> <p>詩編 90編</p>	<p>「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることが出来ますように」(12節)。「生涯の日を正しく数える」とはどういうことだろう。人は「夕べにはしおれ、枯れて行き」、80年生きても「得るところは労苦と災いにすぎない」と悟ることか。いいえ。どんなにちっぽけな存在に思えても、主の慈しみと赦しの伴わない一日はないと知ることではないか。</p>
<p>13日 (火)</p> <p>詩編 91編</p>	<p>「主はあなたのために、御使いに命じて／あなたの道のどこにおいても守らせてくださる」(11節)。荒れ野でサタンが「神殿の屋根から飛び降りてみろ」と主イエスを誘惑した時に引用した御言葉。主イエスは「神を試みてはならない」とサタンを退けた。自分に都合よく「神を利用する」のではなく、「神の御旨に従う」時、御使いの守りが確かにあることを覚えたい。</p>
<p>14日 (水)</p> <p>詩編 92編</p>	<p>「いかに楽しいことでしょうか…朝ごとに、あなたの慈しみを／夜ごとに、あなたのまことを述べ伝えることは」(2-3節)。私たちは「朝ごと、夜ごとに」神との交わりを楽しんでいるだろうか。神は、私たちが神との交わりを喜び生きる者として造られた。私たちの心には、神でなければ埋められない空洞がある。「朝ごと、夜ごとに」神とのつながりを求めて歩みたい。</p>

メール配信登録メール [senfkorn.obc@gmail.com](mailto:senfkorn.obc@gmail.com)

大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課 『からし種』 2024.2.11-2.18

<p>15日 (木)</p> <p>詩編 93編</p>	<p>「大水のとどろく声よりも力強く／海に砕け散る波。さらに力強く、高います主」(4節)。古代人にとって、川の奔流や嵐の海の高波は、人間の力が及ばない巨大な自然の力であった。しかし、それよりもはるかに力強く世界を治める主なる神の威厳を詩人は賛美する。私たちは今日、「人の知識をはるかに超える主の愛」(エフェソ 3:19)を賛美する者とされたい。</p>
<p>16日 (金)</p> <p>詩編 94編</p>	<p>「『足がよろめく』とわたしが言ったとき／主よ、あなたの慈しみが支えてくれました。わたしの胸が思い煩いに占められたとき／あなたの慰めが／わたしの魂の楽しみとなりました」(18-19節)。イエス・キリストの信仰をいただきながら、私たちの歩みは何とふらふらと頼りないものか。それでも一人ひとりに「支え」と「慰め」と「楽しみ」を届けてくださる主に感謝。</p>
<p>17日 (土)</p> <p>詩編 95編</p>	<p>「深い地の底も御手の内にあり／山々の頂も主のもの」(4節)。チリ鉱山事故で深い地底に閉ざされた人々を支えたのは毎日の礼拝であり、賛美と勇気を与えたのはこの御言葉であったという。たとえ光から遠く閉ざされた場所であったとしても、十字架の主が深い闇を貫いて私たちに命の言葉を届けてくださる。今日それぞれの場所に賛美が備えられるように。</p>
<p>18日 (日)</p> <p>詩編 96編</p>	<p>「国々にふれて言え、主こそ王と。世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない」(10節)。これはバビロン捕囚から帰った人が、今も神はイスラエルを愛しておられることを確信し、喜びを表した歌のようだ。詩人はバビロン捕囚という苦い経験から、神は異邦人を憎まれるのではなく世界を支配される方であると、賛美している。</p>